

鈴木壽壽子さんのこと

『星のふるさと』から小惑星Suzuki Suzuko誕生まで

西山 洋 *H. Nishiyama*
(茨城県 稲敷郡美浦村)

小惑星Suzuki Suzukoは『星のふるさと』の著者である
鈴木壽壽子さん(1927~1985)の功績と思い出のために命名されました

■ 命名

2008年12月11日更新の小惑星回報(MPC)のリストで(8741)Suzuki Suzuko = 1998 BR8の命名が正式に発表されました。今、命名の提案者として大きな喜びを感じています。この小惑星の発見者であり命名申請の手続きの手間を取っていただいた小林隆男氏ならびに提案について一方ならぬお力添えをいただいた佐藤健氏に心よりお礼を申し上げます。

■ はじめに

鈴木壽壽子さんと聞いてご存じない方も多いと思われます。1975年(昭和50年)に誠文堂新光社から発行された『星のふるさと』の著者で6-cm屈折望遠鏡によってすばらしい火星のスケッチを描かれた主婦と聞いてようやくおぼろげながら当時の記憶が蘇る方はいらっしゃるでしょうか。[右は1984年頃の鈴木壽壽子さん]

その鈴木さんにお会いしたいと思い、『天界』2008年7月号に「『星のふるさと』人探し」と題して消息をお訊ねする拙文を掲載していただきました。直後からさっそく情報をお寄せいただきましたが、それは鈴木さんご本人が既にお亡くなりになられているという残念なお知らせでもありました。しかし、当初の予想を上回る情報をいただけた上に、年末には鈴木さんに因んだ小惑星(8741)Suzuki Suzukoの命名にまで至るといふ思いがけない展開となりました



た。この間、多くの方々の様々な方面でのご協力を通じて東亜天文学会々員の層の厚みを改めて感じました。そして、このように多大なご協力をいただいた会員のみなさまにはきちんとご報告をする責任があると思い、再び拙い筆を執らせていただきました。

鈴木壽壽子さんは『星のふるさと』出版前に同名のタイトルで『天界』に何回か寄稿されていることから、本会とのつながりの深さを感じられます。しかし一方で、流星塵観測という地味な分野で活動されていたこともありこれ以外にはあまり知られていないことも事実です。そこで、これまでに集まった情報と資料をもとに鈴木さんと天文とのつながりについて簡単にご紹介したいと思います。

■星の世界から降ってきた一冊の本

『星のふるさと』は1975年に誠文堂新光社から出版されたB6変型版114ページの小さな本です。著者の鈴木壽壽子さんは当時三重県四日市市郊外にお住まいの主婦でした。その頃の四日市は四日市喘息や四日市公害訴訟(1972年原告勝訴判決)などを通じて全国に知られていました。

1971年、鈴木さんは初めて手にした口径わずか6-cmの天体望遠鏡で、それもコンビナートのフレアスタック(廃ガス燃焼塔)の炎に揺らめく大気を



透して、大接近した火星の姿を精細で適確なスケッチと記録に残されました。また、観測の合間には、公害の時代を生きる庶民が求める平穏な日常への思いを深い祈りとともに星恋いの物語の中へ織り込むようにして随想に記されました。[左は『星のふるさと』表紙]

前半の「炎上の火星」には1971年および73年の火星接近時の観測記録と随想がまとめられ、後半は書名と同じく「星のふるさと」と題され、幼い頃におばあさまといっしょに見上げ、お友達とともに語り合った星にまつわる思い出などが綴られています。『星のふるさと』とは今は失われている星がいつかは戻ってくることを願う鈴木さんの、ふるさとの星への望郷の記なのかもしれません。ともかく、星の世界の詩人の手元からうっかり滑り落ちて地球へ降ってきたかのような、不思議な魅力に溢れる一冊です。

■発端

『月刊天文ガイド』1971年10月号に村山定男先生が書かれた「大接近の火星」という記事とその末尾に付されたわずか3行の小さな募集記事、これが『星のふるさと』誕生のきっかけになったことは鈴木さんご自身が次のように書かれています。

ちょうどその頃、「天文ガイド」誌に「火星スケッチ募集」の記事が載りました。たまたまそれを読んだ私は、素人の絵日記ではおかどちがいの筋だろうと一度は思いました。でも、(原色スケッチは少ないかもしれない。もしも、このスケッチを見てくださった方がお一人だけでも、私の街の空が裁かれるとき、あの街のあの星空が裁かれるのだと、温かく静かに空のゆくえを見守ってくだされば、スケッチブックに残された影のある思い出に、私が耐えやすいかもしれない。)そんな気持ちに押し流されて、「炎の上の火星」とタイトルを入れてあったスケッチブックを、そのまま編集部へ送りました。[『星のふるさと』結びにかえてより]

■衝撃のデビュー

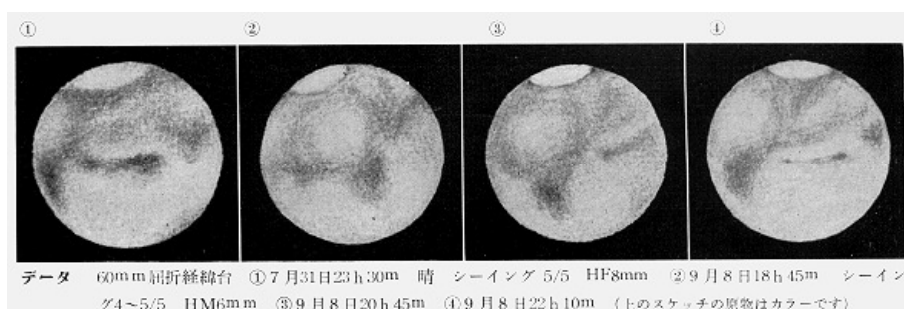
読者の火星観測記録は『月刊天文ガイド』1972年6月号誌上で発表されました。因みにこの号は誠文堂新光社創立60周年記念号でもありました。

12人の観測記録が選ばれスケッチや記録などが8ページに渡り掲載されました。一人一人の記録へ付けられた佐伯恒夫先生の講評は厳しくもまた励ましに満ちています。こういう記事はご本人だけでなくその他大勢の読者にとっても大いに勉強になり、当時この雑誌が果たした役割のひとつだったように思われます。[右は愛機ミザール製エース型望遠鏡 D=60-mm、f=1000-mm]



鈴木さんは25点のスケッチを提出され、その中から4点が掲載されました。佐伯先生はこれに最も長い講評を付けられ、その鋭眼と精確堅実な描写力を驚きを持って高く評価されました。さらに「雨に洗われた新緑のように

みずみずしく」「少年のころの一途に星空の美にあこがれていた純真な心をおもいだし」と先生ご自身の感動を率直に吐露されています。



[上は6-cm屈折による火星スケッチ(『月刊天文ガイド』1972年6月号より)]

■観望者から観測者へ

1971年にすばらしい夏を鈴木さんへプレゼントしてくれた火星も、72年には6-cm望遠鏡の観測対象からは遠く去っていました。それまで四日市公害に苦しむ人たちの助けになるようなデータが欲しいと心の中で思い続けてきた鈴木さんに転機が訪れたのはその頃だったようです。そうした人たちに役立ててもらえるような観測記録を残す決心をされたのです。「星は好きだけれど、観望者であった私が、観測者を夢見るようになった」と観望の立場から、観測の立場へ「一字の橋」を渡る決心をされたときの心情を『星のふるさと』の一節に書かれています。肩肘張って公害反対運動をするのではなく、自分にできる範囲で精一杯のことをしようという、これは鈴木さんの凛々しき宣言といえるでしょう。

■流星塵観測とその後

鈴木さんが選ばれた観測対象は流星塵でした。その分野の第一人者である森久保先生のご指導を受けながら、自宅の庭で採集したプレパラートを顕微鏡で観察されていたようです。かつてスケッチ原画をご覧になったことのある中村祐二氏はその時の印象を「まるで顕微鏡で実物を覗いたようなリアリティがあり、私など百年かかっても到達できない人だなと感じました」と述べられています。

最初の観測報告として1972年11月-12月分が森久保先生発行の『流星塵回報』1973年1月号に載りました。それから6年2ヶ月の間、途中77年秋

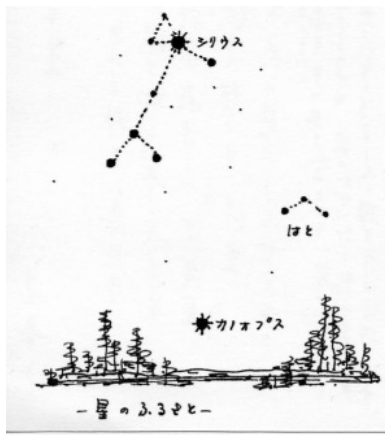
の一月半の病欠以外は熱心に観測を続けられました。最後の報告となったのは78年12月分で、79年3月号にはその観測記録と同時に「2月に入院、手術を受けられた由、当分測定を休まれる」と書かれています。これによって、そのころ体調を崩されたことが窺われます。そして79年9月号に「入院加療中です。一日も早く全快されます様祈ります」と報じられたのを最後に鈴木さんに関する記述は途絶えることとなります。長期にわたる闘病生活により観測どころではなくなったことは想像に難くありません。実はその後も体調の良いときには測定をされていたようですが、この時期のものは報告されていません。ここには鈴木さんの「観測」へのこだわりが垣間みられるようです。[上は愛用の顕微鏡オリンパス EC の同型機]



体調の許す限り測定や他の患者さんのための活動をされていた鈴木さんでしたが、1985年(昭和60)、残念ながら癌によって亡くなりました。享年58歳でした。

■『星のふるさと』とともに

鈴木さんは天文にとどまらず多方面で非凡な才能をお持ちでしたが、社会的にはごく平凡な妻として母として生活され、また天体観測者としても流星塵という地味な分野で活動されました。さらに『星のふるさと』出版から10



年の後に病に倒れられたことなどから、亡くなられた事実すら天文関係者の中でもあまり知られないままこれまでほとんど忘れられていました。[左は鈴木壽壽子さん自筆の未発表挿絵]

しかし、残された著書『星のふるさと』は33年の時を越えて今なお読む人の心を強くふるわせ深く深く染み入るような感動を与える力を持っています。それだけに長らく絶版となって新たな読者の目に触れる機会が無いことは残念でなりません。

この度の小惑星命名を機に『星のふるさと』再版が実現し、さらに多くの方の愛読書となることを心より希望しています。

日々の暮らしの中で星と語り合えるこの空がいつまでもありますようにとささやかな願いを抱くすべての人にとって『星のふるさと』と鈴木壽壽子さんの存在は大きな励ましであり続けることでしょう。

■略年譜

- 1927年 岡山県岡山市に生まれる
- 1955年 結婚され三重県四日市市に住む
- 1971年 口径6-cm 屈折天体望遠鏡購入 初めて火星を観測
- 1972年 『月刊天文ガイド』6月号に火星観測記録が載る
11月 流星塵観測報告開始(～1978年12月まで)
- 1973年 火星を観測
- 1974年 『天界』5月号、7月号、12月号へ寄稿
- 1975年 『天界』4月号、5月号へ寄稿
12月『星のふるさと』刊行
- 1978年 『月刊天文ガイド』7月号に皆既月食カラースケッチが載る
- 1979年 1月以降流星塵観測を中断。この頃体調を崩し手術を受けられる
『天界』9月号へたよりを寄せる
- 1985年 8月逝去(享年58歳)
- 2008年 12月 小惑星「鈴木壽壽子」(8741)Suzukisuzuko 誕生

■謝辞

最後になりましたが、『天界』2008年7月号に掲載していただいた拙稿「『星のふるさと』人探し」をお読みいただき直ちに情報をお寄せくださいました高橋進氏、佐藤健氏、中村祐二氏、長谷川一郎氏、また鈴木さんが生前お住まいになられていた団地まで中村氏とともに出向いて調査をしてくださいました田中利彦氏、貴重な資料の閲覧あるいは提供の便宜を図っていただきました、高橋雅弘氏、東日本天文資料センター様、星天の会様、川崎天文同好会様、ネットを通じて情報を提供して下さいましたみなさま、掲載記事の一部使用許可をいただきました月刊天文ガイド編集部様、そして、何よりもお仕事のお忙しい時期にもかかわらず快くお母様の思い出をお聞かせいただいた上、お形見の写真その他資料

の掲載をお許しくございましたご息様に、この場をお借りして深くお礼申し上げます。

鈴木壽壽子関連資料ライブラリー

■ 著書・寄稿・観測報告

- 『星のふるさと』 誠文堂新光社 1975年
- 『月刊天文ガイド』1972年6月号 火星観測記録
- 『月刊天文ガイド』1978年7月号 皆既月食カラースケッチ
- 『天界』1974年5月号 【星のふるさと】 おおぐま猫
- 『天界』1974年7月号 【星のふるさと】 立ち話
- 『天界』1974年12月号 【星のふるさと】 冬の思い出
- 『天界』1975年4月号 【星のふるさと】 立春
- 『天界』1975年5月号 【星のふるさと】 こと
- 『天界』1979年9月号 【たより】 觜宿の和名について
- 『流星塵回報』1973年1月号～79年3月号 観測報告
- 『流星塵回報』1979年6月号 1978年月別降下量グラフ

■ 関連記事

- 『月刊天文ガイド』1975年10月号 佐伯恒夫氏の文中に火星スケッチ掲載
- 『月刊天文ガイド』1975年12月号 佐伯恒夫氏の文中に火星スケッチ掲載
- 『月刊天文ガイド』1976年4月号 読者サロン 女子中学生からの投稿
- 『月刊天文ガイド』2009年3月号 小惑星ガイド 新たな小惑星の命名
- 『天界』1976年3月号 【新刊紹介】『星のふるさと』
- 『天界』2008年7月号 『星のふるさと』人探し
- 『天界』2009年1月号 「鈴木壽壽子さんのその後の消息」(2行の短報)
- 『天界』2009年2月号 【編集部だより】小惑星命名の報
- 『天界』2009年4月号 「鈴木壽壽子さんのこと(前編)」
- 『天界』2009年5月号 「鈴木壽壽子さんのこと(後編)」
- 『流星塵回報』1979年9月号 消息について1行記載あり
- 『流星塵とその測定法』 森久保茂 銀河書房 1986年
- 『改訂版 日本アマチュア天文史』 恒星社厚生閣 1995年
- 『続 日本アマチュア天文史』 恒星社厚生閣 1994年

■ 広告

『月刊天文ガイド』1976年1～7、12、77年3～8、12、78年1～7、9～11、85年1、5、6の各月号

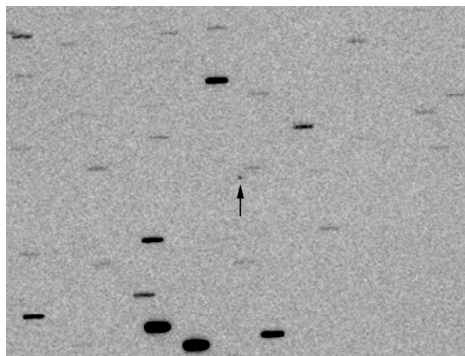
『南十字星を求めて』1981年 巻末広告

その他、『子供の科学』等にも広告掲載あり

★★★



眼視の特訓に使ったボールの火星。これについてのエピソードは『星のふるさと』p.46をご覧ください。



小惑星(8741)Suzukisuzuko
2009.03.20 23h48m-24h44m(JST) exp.60sx12 T0A130+CCD
三重県伊賀市上野 田中利彦氏撮影

★★★

2009年4月7日 小惑星(8741)Suzukisuzukoは地球へ最接近 光度17.1等